

男性の地域デビュー コツは?

本格的な春の訪れはもうすぐ。退職などをきっかけに、春から新しいことに挑戦しようと考えている人もいるだろう。地域デビューしたり、サークルに参加したりするにはどうすればいいのか? ぐらし面の愛読者組織「よみうり生活応援隊」の男性メンバーに経験を聞いてみた。
(板東玲子)

「頼まれるうちが花。頼まれごととは断らず、引き受けてみては」と話すのは、埼玉県の外山毅さん(67)。60歳で企業を退職した後、声がかかるままにマンション管理組合や自治会の役員に就いた。知人の勧めもあって地元自治体の行財政改革推進委員会の委員にも応募し、採用された。

「仕事が増えたので新規のものは断っているが、暇な毎日よりはずっといい。視野も広がるし、何より誰かの役に立てて幸せです」

大阪府の田中恭雄さん(75)は65歳で退職。一人でウォーキングなどを楽しんできた



笑いが絶えない「ジョークサロン」に参加する野本さん(前列左から4人目)

よみうり生活応援隊

頼まれたら断らず *まず白

が、3年前に自治会の当番がまわってきて役員になった。「深く考えすぎず、身構えず、前向きな気持ちで挑戦した」住民が描いた絵を集めて展覧会を開催するなど、1年の任期を終える頃には地域の人との顔と名前とが一致するようになり、雑談できる相手が増えた。「地域のことをよく知らないまま40年以上ここに住んできたが、『この街で生き

ている』という実感が持てるようになった」

役員を退いた今も、交通安全運動や避難訓練、お祭りなど地域のイベントに積極的に参加している。

女性はPTAなどを通じて地域との関わりを深めてきた人が多い。一方、男性は退職後に「何をしたいかわからない」という人が少なくない。

自治会役員を10年続けている山形県三浦健司さん(70)も「まず身近にある自治会に参加し、人の輪に入ってみては。それが第一歩になるはず」と勧める。人脈ができれば、災害などいざという時にも心強いと語る。

地域で学び直しをする人も。兵庫県の川口正洋さん(62)は昨春、「ふるさとひょうご創生塾」に通い始めた。阪神大震災の教訓を踏まえて創設された塾では、地域で活躍できる人材になるためにボランティア活動やコミュニケーションの手法などを2年間かけて学ぶ。「震災当時は大阪府の公務員だったので、被災した地元のために働けなかった。ずっと地元のために何かしたかった」と明かす。

コミュニケーションの心得は、まず人の意見を聞き入れること。心をオープンにして自分をさらけ出すため、「飲みニケーションも重視している」と笑う。

好きだと続けやすい

地域やサークルなどの活動を長く続けるコツについて、「子どもの頃に好きだったもの、関心のあったものは続けやすい」と語るのは、東京都の野本浩一さん(68)。言葉遊

自治会に参加

びが好きで、1989年に仲間と冗句を言い合う「ジョークサロン」を発足させた。都内で毎月例会を開き、創作した都々逸や回文、川柳、小話などを会員同士で披露し合ってきた。他人の作品を悪くい

わないことがルールだ。「笑いを共有する楽しさは、生きるエネルギーにつながります。趣味の活動には、仲間を探したり、情報集めたり、自分から動くことが大事です」と、助言してくれた。

*「応援隊」の記は毎月第3日曜日に掲載し、「日曜の朝に」は休みます。

悲しいな

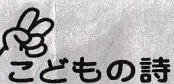
工藤 悠我

ぼくは古典を暗記しているテストだ

自分の番だ

ぼくはすごいとききしたが
だが

とききすぎて言えなかった
すごく悲しかった



こどもの詩

(青森市・大野小5年)

100%暗記していたのに力を発揮できなかったそうです。悔しいね。
(平田俊子)

40代女性会社員。仕事を始めた後、夫と別居することになってしまいました。

結婚を機に好きだった仕事を辞め、夫の転勤についていき、子育てをしました。しかし、子どもが中学生になり、再度仕事をしたいと思い始めました。

夫は私が働いて交友関係を広げるのを好ましく思わず、「養ってやるんだから、子育てと家のことだけすればいい」と言います。

40代に入る前、「最後のチャンス」と思い切って就職しました。

「働くなら離婚」夫と別居

2人の子ともも応援してくれ、充実しています。しかし、夫に「働くなら離婚する」と言われ、別居することになった。私の母は「子どもがかわいそう。養ってもらおうほうが楽なのに」と協力的ではありません。充実している自分の姿を子どもに見せたいと思います。しかし、昔ながらの「妻や母の役割」を求める意識が世間には根強いのです。自分がやりたいように生きるのはいけなことはないのでしょうか。

(大阪・O子)

人生案内

山田 昌弘

(大学教授)